

13  
3098  
6

櫻姫全傳曙草紙卷之五

江戸

山東京傳補綴

曙卷之五

大吉

第十七

鷲尾家士復故君誓

弥院二郎 姫と負逃去ける途中や、篠村二郎 山吹瓜取へて  
飯来ふ恰好出會互ふ夏のめしはと語り四人相連て公光が家小到り  
弥院二郎 篠村兩人相州竹の下道の一別以来の夏と語りのひ 弥院  
二郎 清玄が執著の悪念強く 姫を殺して 夏彼を殺して 姫を救ふ  
夏の始終とめしは 梶ひめ 甦生して 彼を苦められらるる 細と語り  
同ふ 志ひより 扱 弥院二郎 篠村と心と合せ 田鳥造 酒丞と始して  
ら かしらよ かくれ 往て 仇家とら 同志の 義士等と かくる 平本  
と 打く 亡君小 手向と 相議しける 所小 三木之 助伴 宗雄も 男の 仇

昭和九年  
七月二十四日  
末

とひくい家を再興とべりくつとめりて宗雄を仇打の主と藤村公光  
弥陀二郎造酒丞と始りて荒部三郎前山四郎栗村善太雀部強助  
志麻勇平船井橋二和久九郎八郎横作惠六船城十郎との余宗雄が  
家士三人藤村が妻山吹同家僕藤六等都合十八人信田が家小乱入して  
つひ平太夫を打取首以義春の靈前ふる向て追善を修一夜と日小  
ほれて旧地小館をつら極むりかうりじめけうへ野分の方のゆく草か  
りうらそるぬべ一珠更九郎判官の賜ら太刀と家系の一巻を持てたりのれ  
しとさればこれより家相續はかき誰よりけ夏小用べと宗雄衆人小  
ひらひて議しつる造酒丞とて公某が命せしむとさるべいふゆして湯ゆ  
とあわゆるまかきせんとなど宗雄をひ則りて小命けけけみよとの丞  
いそだ旅のしとゆいと調いづくとのめてともなくまき出たり夫の扱おき夏

蝦蟇丸日向の國小對て住居をりとのめたり小飯来りけけ母の方飯  
國のぬひとのべくのち松虫鈴虫兄弟の娘出奔しとるは語りけれ  
が丸丸をばとて賣べとの瓜惜き宝と矢ひつる夏とていひて悔  
重ていひつる彼國小住居をりとのめたり小飯家を取収汝を連て  
彼不ふ去心寄く居むべとの母の方とていひて夏とていひて悔  
が丸丸が携来つる旅の具を取とていひつる行李とひつる尾長の蝦  
蟇數のをえつてて心中小ぶうりけるが氣なれ体をば其夜よつて  
か丸丸とひけるか人前年の丹波の國鷲の尾の家小捕れ獄舎を破  
りて逃出ふに夏とのどやとのめり丸丸をばとていひつる心中小怒つていひ  
るぬ体をばいひつるのひつる我るかをえ曾てははけりていひつる  
母の方いひつるか人行李のうら小携るる蝦蟇丸尋ねのれべと物不

のどと蝦蟇つゝひといふ賊徒の證お持りのしはまぬのふおん若彼輩  
 の中間めて前年鷲の尾の家お捕れぬ人ありまなやと尋ひて問侍  
 ありと云ふ。丸云いふも我いぢまつゝひの首ありぬのめ新お手下の  
 時あるお携来りぬされと鷲の尾の家お捕れぬおむえはそら  
 我手下の老あやのりつゝんとつゝりさるふてもはいつのふかの蝦蟇とえ  
 たるやそつゝぶらりけれぬおの方け答ふおつゝりまのりておりぬ  
 其故いひて語つゝとべ一旗のつれものふ且酒一のつゝひあへる  
 云てけ場ともせらるるこれより互お心底と疑ひてさふらりかま丸おひて  
 舟の方の携来り太刀のしものさしと珠お錦の袋お入る守りぬの  
 と肌さるごとと持るといふらりけれぬと云ひれと云容易お実をけいけんと  
 ちひ次るお酒ともめつゝと碎しお熟睡時をうらつゝかの袋とらりて

明者之五

ひつれたるお就考の尾の家系あるは大小鷲ささつゝと鷲の尾の内室お  
 ちひはかれ男子おまゝされる手段のうへお膽太ぬ女あるは我義春と打  
 ちぬ寝首とお人も計がじつやのさむれ殺して後日の災とさうお  
 して心成さつゝめその夜いそりお臥あがり扱つゝる日おつゝりお分の方への  
 ち鏡おひつゝ髪とらりのげ居る油ひの折をうかひか丸つとよそ  
 押伏高手小手おらりけれぬおの方鷲尾おん狂氣にまぬお  
 つの罪ありておんいすめおみどと云ひぬ丸答りせと門口の柱おらりつゝて  
 云くおんお福原の皇居お仕へる官女野分とつゝ名と云ひぬつゝりあて  
 實は鷲尾十郎お義春が妻おるべし昨夜おがお持ると家系の巻  
 とて我れと曉しぬとて生おべき者おぬべし仔細と語りつゝと  
 我平田四郎お子ありと云ひつゝり實は海賊の首長木冠者利元

の子あり義春が先祖頼朝尾太郎維綱が父元と打れて無念骨髄  
 不徹しせめて其子孫より義春を打て恨をくわむと前年午下の小  
 賊どもと具して丹波小つら敵のひもとうまひくろ小折のく重病小力  
 よしつて捕へられくろと辛く逃去時のつらとまらろ小幸信田平太夫  
 小荷擔して第中小忍入義春と打て日來の宿志とどげぬまらるゆゑ今  
 汝と殺して後の世とまらるあり観念せよと云ゆとど分の方齒と  
 牙とまらして云扱へ義春殿と打つる信田の刺客は汝めてのけり我一旦は  
 が愛情の切なる心迷ひくろ荒家小月日死かるといふも汝我と  
 日向國小連ゆんと云ゆ遠國小つらく日來まらるとろ小娘小のひ  
 がく殊小昨夜汝が答へくろこのじのゆくれ且汝小いさまられ途中小  
 於く汝を害し逃去て娘様ひりのゆへと尋ねると暗小胸とまらるめ  
 時春之五二

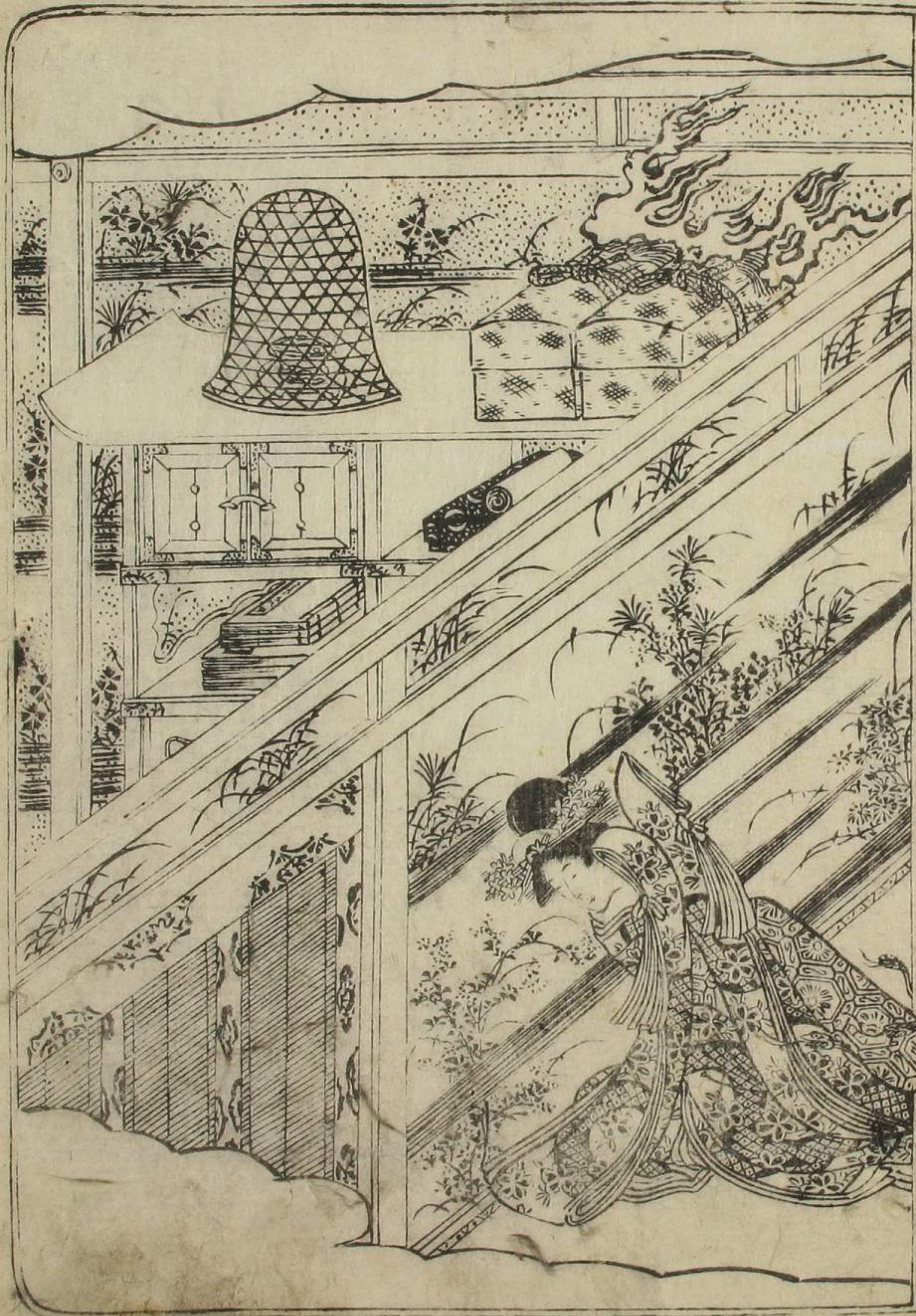
つふ小前を越られくろくろくろく一人の男子小てのりあろ女の手  
 段をおそれくろくろく殺さんぞら比真至極の仕業ありくろく繩を  
 立合て勝負を決まらると云が丸打笑比真もいづへ籠を閉て鳥を失  
 んより圍のうらの獸を屠る小まらじと中真途小赴いと云つ氷まら刀を  
 抜て唯一打とらうのぐ時俄小一陳の冷風吹来て空中より一の小蛇  
 のつれ出てが丸小死つさ右の腕小まらひつとくろく忽腕をひれて打  
 ここのめとらるじ惘然として心たぬまらる強氣の者あら自己志を  
 とげませ小蛇をとりとら又刀をあらうのろ小前茂林の裏小弦音漂と  
 鳴らさそ一さらの箭死来てが丸がびなまらるを籠小く射とそ一  
 とら一箭あらうとくも屈強の矢坪あらばけりつてたりのべき忽倒て  
 死てたりとらる小茂林のうらより旅装束と一人の武士二所藤乃

弓を小服ふるくさきとてめりねお悠くと歩に来りて野分の方のいほり  
をこれ上座小をきて恭礼をかこる野分の方け人をふる小乃是田鳥  
造酒丞ありんばよりふと限ま一造酒丞頭をさげて云ける君の所  
ゆくへをのりんと心を碎さやうくは山中小かくれ住みよしをすゆくと  
らツーことを尋りたりつふ折よく危急を救をりし誠小御運のつよ  
きおるうとのひて宗雄と主とて信田平ち夫を打取館を新造して  
様ひかを移しうら始終を語りね野分の方まよくさびはる丸と  
云者こそ信田の刺客とあり相公を打とる者どと告ぐんばみこの丞  
とらうむと亡君の仇とゆいふるをさび野分の方け家小ありゆを  
とひる小野分の方け丸が妻とありとらうつていと唯れ小あご  
ゆんで捕れつる幸小あをさびとらうとらうり宝刀家系と失

ほどとて二品を渡りけねみこの丞かいつて取とさめ外の方小出扇  
とめけてさうまねくとひとく茂林のうらより十四五人の從者梨地小  
高時繪して光をとらうやうなる糸物をかきと出来と一かさの衣服  
をとらうても野分の方けねのきねをねだるとこれと著更れねおの  
色手小うのさうりふかやたりみこの丞いざ御取國のねべ  
とつふおど野分の方けうらなげねとらう小糸物小のりたねみこの丞  
る丸が首打落して携へ從者小下知して前後の列を正し麓と  
さうていとだ下りぬ

第十八 櫻姫靈二妖氣三卧病

去程小造酒丞野分の方を守護し蝦蟇丸が首とらうとて取らね  
宗雄様ひめいさうり一家中のさびるのめあうどる丸が首と義春



曙卷之五

京鳥尾の家  
 再真此後  
 こゝろの  
 怪異あり



の墓前かぶせん小の向たけけ吉日を多うして宗雄様姫と婚姻をそのへ就鳥の尾乃  
家を續ね此時このとき藤村二部公光もあつて山吹と婚姻をほしおつり  
然小弥陀二部宗雄小よし多う某若年の時又持しりしつらむ  
より亡君の御勘氣をどうあり御在世小御免とらひせむ  
宗雄うけむ義春の靈前小於て勘氣をどういぬけ時藤村二部が勘  
氣をどうその小免一とらむ相公亡君小代むひて沙免とらむと願ければ  
の望ありとらむも亡君の仇を報て後と存トられしとらむと願ければ  
とめて御暇をたぬられしとらむと願ててもさるはじと体たれば  
是非ありといふとさるせりり弥陀二部赤ひ常照阿闍梨をそのこと  
法然上人の徒とらむとらむ姿をうへて粟生野光明寺の境内小庵をむとらむ  
て住仏堂建立の志願りつらむとらむと就鳥尾の家再栄多うが爰小又一つ  
の凶支とそいでたれ様ひれ甦生と後とらむ日のををさるはじと願てお  
暗所を好む若くして樂まむ病ありのころありたるが一夜野分の方  
臣を慰んとて酒宴を催し群ふと云けるハスとらむの爪音を  
を何ふまゝ一手調てせせらんやと云様ひめ答てけ年月愁つこのめと  
ありつらむ小琴こそも手小ぶふれねば学び得る手業もとらむとらむ  
ふゆへなむとらむとらむとらむとらむと合を討もおつらむと  
んと云神分の方打笑別小つ人もたまふ何苦一おとらむとらむとらむ  
らんとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ  
さなそやふ小唱曲あつて様ひめとらむとらむとらむとらむとらむとらむ  
とらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ

時若年五



色も泣き小唱なみ多おほくく妙手たぎのちちふふるるががううててああららもも堪た能たふふててああらら
  
 哀あはれれをを催もよほしし世よ分ぶんの方かたへへ目めををささらら頭あたまををささららてて穿う入いるる姫ひめへへままかかひひれれをを由よしけけるる
  
 折おりりもも俄はたた灯あかり火ひららくくくくままりり灯あかり臺だいののおおげげ不ふ怪けしし人ひとののおおげげああらられれのの姫ひめらられれ
  
 ををええててああららわわとと叫こゝろ世よ分ぶんの方かた其こゝろ色いろ小ち整ととのええ眼まなこををささららてて怪あや物まものををええつつ枕まくら
  
 刀やいばをを抜ぬいていてささららとと斬きりり小ち忽たち一いつ團だんのの青あお火ひととあありりてて消き失し只ただ雲うみをを斬きりりとと人ひと
  
 中ちゆうへへてて刀やいば小ち刀やいばののゆゆりり姫ひめののひひととははじじととああららるる琴ことをを真ま二にのの小ちささららりりけけりりめめらられればば琴こと
  
 柱はしらととああららとと飛と散ちててささららとと糸いとののささららとと尽つくく蛇へびとと化けかかままららびびををたたとと姫ひめのの
  
 方かた小ちむむひひくくれればば姫ひめへへこれこれをを一いつ目めささららりり忽たち倒たふしてして絶たええぬぬ膽たん志し世よ分ぶんの方かたをを
  
 惘ぼう然ぜんととしてして刀やいばををささららととわわくく尻しつぽ居い小ち童どうととななめめららるるがが姫ひめののああららわわををええてて整ととのええ
  
 いいそそががへへくく侍さむらい女によ等らをを叫こゝろ氣きつつけけ薬くすりををももららぬぬ湯ゆををももららぬぬととああららわわてて小ち指さしけけりり小ち
  
 ととままじじあありりてて中ちゆうへへてて生いららぬぬこれこれよりより姫ひめ又また病やまいのの床とこ小ち固かたけけとと一いつ野の分ぶんのの

曙卷之五

方かた宗むね雄ゆうをを始はじめ一いつ回かい小ち愁うれるる支し限げんはは姫ひめのの病やまい只ただううららくくとと夢ゆめ中ちゆうののどどくく小ちああららりりてて
  
 本ほん性しやうをを失しひひめめののももととままままどど良りやう医いををままねねききてて靈れい薬やくををももららひひここららぬぬぐぐ療りやう養やう
  
 ををららううけけれれどどもも露つゆももううららもも驗けんええええどど世よ分ぶんの方かた世よのの人ひと小ちままままららりりてて子こををここらら
  
 うういい性しやうままれればば殊ことごと更さら小ち悲かなしし昼あひ夜やわわくくををささららととああららわわててどど看み病びやう
  
 けけるるああららわわ小ちおお丑うし三さんつつぶぶりり小ち指さしけけりりめめ心こゝろ氣きつつれれるる小ちややままややとと眠ねりり世よ分ぶんのの
  
 方かたもも看み病びやう小ちつつららりりててままじじととままままららりり折おりりもも廊りやう架かの方かた小ち人ひと乃ひ足あし音ね
  
 ひひびびきき障さや子こががささととののくくらら音ねをを世よ分ぶんの方かたねねあありりをを醒さめてて顧かへりり館たねののううちち小ち
  
 見みええられれぬぬううららくくたたららるる禿かぶ二に人にん鎧よろい唐たう櫃びををおおぎぎてて出で来きりり増ま額がくのの簾れんのの下した
  
 かかろろとと蓋かぶたををののくくららととええんんじじがが裏うらよりより教しゆ育いくのの蛇へびををおおぎぎたたららるる簾れんのの裾すそををささらら
  
 ててここひひ入い様やうひひめめ小ち飛とつつきき首くびををささららりり手てららびび腹はらををささららりりひひつつここけけりり小ち指さしけけりりめめ
  
 ののああららわわくくとと叫こゝろつつききををももららりりてて苦くいいけるる世よ分ぶんの方かたををささららりりてて姫ひめををたたとと



櫻姫妖氣  
 ふりて病  
 目も夢中  
 数百の蛇  
 身上ふま  
 苦しむ





承るふさぞあさほくおがまらぬ拙僧修行とぞ験あつてもおぢえぬ師の房の命  
 こひ二郎の公のこのと點いざとこれまふまふと来つ力のおらんこの念をさへ  
 のこふおぞ宗雄野分の方不かくとまこえつげに此分の方赤び出むひて姫の病床  
 のしらびたくりかくて阿闍梨二郎の公と具とてやとふつれに此分の方宗雄病床  
 の左右おる田鳥篠村山吹等下の方小並居り阿闍梨且及佛の座を  
 びた香を指して権念下切病人小對面まへこのこまひりれば山吹立寄て屏  
 風をひこのけね阿闍梨つらつらふ錦の袷をさへんらうふ二人の姫黒髪を  
 ほど眼息ふらりわるととめくと眠居らりいふさぬ病疲さるととて肉脱腫  
 瘦の袴まぎ自然の羨豔利お花お雨をまぐと白玉香をそへる風情あり二人  
 との小おなドさぬおいていづれを真の姿いづれを假の姿といふらば阿闍梨珠教  
 と袖らふ持如衣袂をひこのげつらうととてこのこまひりいふ清玄と

中んが靈鬼我らる理をよくばよはかりも佛体を穿し身をりちて  
 怨慕の凡情戒行をやり罪なれ姫を苦めて障災まるといふの理をこと  
 やふ執惑の悪念を滅して成佛得脱を欲せしは清玄眠を醒せしと  
 色さうくのこまひりれば二人の様ひちやり目とひくた眼とめば阿闍梨  
 をえやりて頭を打ち成仏の望さうは唯け姫おつとこひて苦痛とさ  
 らとこらうとゆも無益の詞を費しゆまといひじて又わらうね阿闍梨膝  
 ととてまじ衣の袖をまれのげ詞をこげせそのこまひりらぬのはや執著  
 の悪念流く中有の迷衆とあり更お流轉の穢土をくまるとのこまひり然るお  
 我偶師の房の命をうけ違ふ来りて汝を度せんとも極重悪人死他方  
 便本願の利益あらうんや清玄いふくと責なすひれば二人の様ひち再  
 眠を醒して居たりやり坐を西していひらうとやうの直めりとも子細を



晴巻之五



怨霊の所乃  
 ようて様ひわ  
 離免病  
 をや  
 一体二形  
 とある

語るまとはひくれども阿闍梨の慈心を感じて涙を根のいれを語り  
 侍らせしこれをはて我理を察し教化をやめよんも言てと元来  
 られ清玄が霊不あつて玉琴が怨念をてぬまはりて都の白拍子ふてゆ  
 一が故君義春公不贖て妾とあり名を玉琴となりて後村八郎公連との不  
 のづけられ寵愛浅くむつひ公の胤を中じて己八月ふらなるお世分  
 の方の嫉妬あつて蝦蟇つうひの所持たる尾長蝦蟇と云ひのを以て奸計を  
 施し兵者ちふ命じて妾を盗らじり目の前ふてまづり殺しふさせられ  
 のくまもど面の皮とくた赤裸おはして大江山の谷川ふまらわいかいさ後日  
 直のりれんをかされて其夜くらら兵者ちと手打に盗賊の体ふりては  
 て衆人を欺さぬ痛りや公連との妻を奪れらふらつてつひのり  
 切腹して果られまらふ妻が死骸のかりのくま繩をひて川下ふ流とつる

大小腹をらひやがれても胎内の子をらひ殺されんとせしと弥陀二郎  
 この情ふより拾取りつうがやがて死けり其時妻が鬼魂我子の胸間ふ  
 還著して生うつせ弥陀二郎の命抱ふ管りけるつひ旅中ふて清水寺  
 の故月阿闍梨ふとて成長して徒弟とあり法名を清玄とむつりぬ  
 ぶれば則清玄の故君義春公の御胤ふて極むゆゆの別腹の兄弟とじ  
 妻が鬼魂清玄がやげんふつれとひせめて悪趣をまぬれんる字を文讀  
 經かこしめむ乃力堅固ふかこまりせらる一年極むゆゆの地主の社見かこ  
 て来たる折ういづく養麗ま行粧をえてわくほく我子清玄へ正しく  
 姫のえあり妾恙さく産あつてまゆの如く大勢ふらづれ桑田の長者  
 の若君とぞ敬せられ妾とてお世の樂をこらめ人のを世分の方の嫉妬  
 かしりて非命ふ死さるのくま若君ともわくのくま名もまた出家とす

かゞ夏なつのららとやととひつ姫ひめの美うつくしき粧まけと清せい玄げんのこころがけはあつ  
光景あきげとくくべふふは怨恨うらみいふまゝとて地獄ぢごく小墮せうだとてい承うけ崇たか  
とてい仇うらみと報恨うらみをくけむと再清またせい玄げんが胸間むねまふけ入い現在げんざい在我わが子こ小せう凡ぼん  
情じやうを記かさせ戒行かいぎやうをやむじめて姫ひめをさるまじくも姫ひめ恨うらみははとひくも  
人ひと小せうをぶれてふんふ小せう凡ぼんの方のうらの性質せいしやうあらば且また目の前まへふて姫ひめ小せう苦痛くつうと  
うけりて小せう凡ぼんの方のうら小せう歎なげをさる其後そのち小せう凡ぼんの方のうらもとて殺ころさんとふふ  
ありされば清せい玄げんと母子ぼし兩人ふたりふけれども原はら靈れい魄はくのつらう様さまひらば  
小せう野のの里さと小せう凡ぼんかた定業ぢやうごうふりて死しせしと鳥部野とりべのふて甦そと生せいさせ今いままで  
一命いちめいを保たもつりても妻つまがま世業よふて實まことの甦そと生せいふのど口くち小せう凡ぼんの方のうら小せう永なが  
憂目うれしをこえせんが為ためあり罪つとなれ姫ひめを苦くるしつとよのいづく一ひと房ばうふとあつる  
がここの夜よ姫琴ひめことをさる其曲そのまがの妙たぎなるふひりて再出来またきり妻つまが殺ころれと

時の苦くるさをとひ出して又また仇うらみをさるといふありね又また小せう凡ぼんの方のうら蝦蟇せま丸まるが為ため  
殺ころすべしを妻つまが靈れい小せう蛇じゃとありてさるゆも生せいかさて百憂目ひやくうれしをえせとて  
ふてとて殺ころ人ひと乃なるあり又また相別竹あひわけたけの下したふて妻つまが靈れい小せう蛇じゃとあり弥陀やだ二郎にらうの  
をさるびとて篠村しのむらのふ會あひせもみ二郎にらうの我屍わがしんをくじ我子わがこを拾取ひろ  
むりし恩人おんじんありとる村むらのい妻つまのふ父ちち公連こうれんの切腹せつぷくのじのさる其身そのみ  
も浪なみの才さいとありむひ痛いたいふふ兩士りやうしを會あひりて互たがひふ力ちからと合あはせ  
義春ぎしゆん公こうの仇うらみをもとせしむべし妻つまが寸志すんしかりけり細こをさるさるめと承うけ  
姫ひめをさるまじく小せう凡ぼんの方のうらを苦くるめんととひく阿闍梨あせりの慈公じこう點てんかて  
誇たかりやんせやをさるめと成仏じやうぶつの望のぞはさるや御おん取とりのふとといひとて  
小せう凡ぼんの方のうら小せうひりては妻つまをさるふり殺ころしふさせとて時妻ときつまが苦痛くつうのうとて  
あつんととふむや生せいりり死しりり六道むだう四生しじやう小せう怨うらみをさるべしといひとて

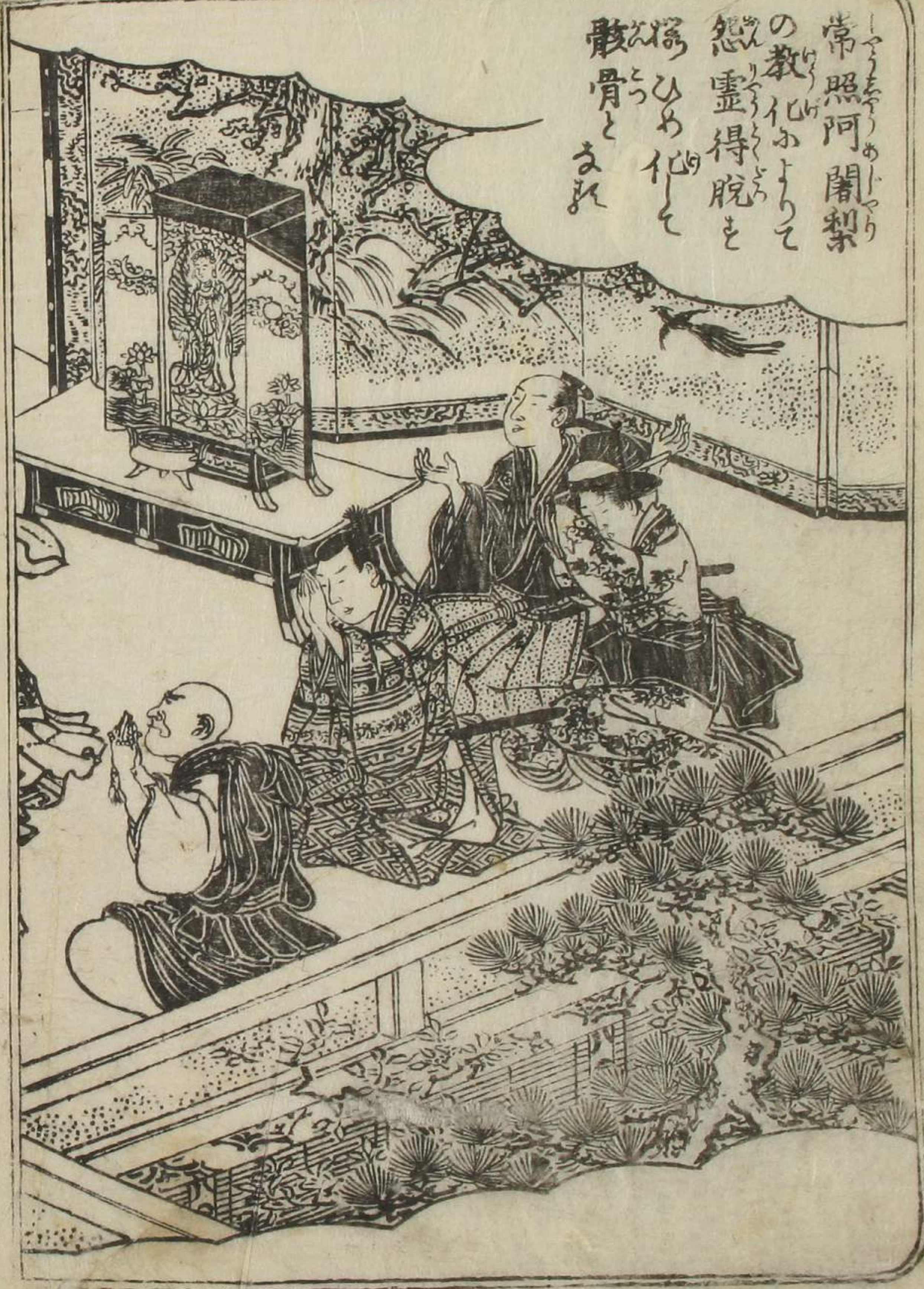


忘れつゝ子細を語らうへ永此土おとまりしにえりく近きおぼせをり  
殺しとりお捺落お率てゆらんおひもあべいと云つゝ柳眉をさして星眼  
をうつしてことありける光景おほしあもあつちありやくのいのちも  
おのそくくさも二人の様ひめおほさぬおてのぐれを真とらうのぐ  
たれくも清玄の死霊とのとひて玉琴お怨鬼あつことおふつと  
これをゆつておどろたぬ時お阿闍梨病床近くよりてのそくひらる  
汝お宿をまらわ遺恨の涼きも理るれど怨恨の悪鬼とありて水劫悪  
趣おらじまんより我教化をうつりてしや成仏得脱せよとて四誓の偈  
を敷遍誦し心経三遍くらあひ随求陀羅尼光明真言顯密甚深乃  
神呪陀羅尼を誦しおひりる不思議や及佛の白毫より光明赫奕  
発して病床をくじりけんお忽二人の様ひめひん伏てこれを拜し感涙

を流しつゝのまらりざやとふとや今恨ももけつことひわづらく安養  
浄土お引導したまりれじと云てや得ぬの侍るが阿闍梨おび十念を  
とぐけおひて後身をおじて二人の姫のしろお立色をくげはてのそりく  
殻を出て殻お入る旅舎お宿をら如く地水火風一もび散ど。  
蜻蛉の湯お落るが如く汝從來是一は是二ウ  
とひひさる珠数をりつて且左りの方の様ひめの頭を打むお忽姿こえ  
うせそ一つの小蛇とさう頭より光をとらちてお失ぬ又右りの方の様  
ひめを打むへ今ても嬋娟たる花の姿忽氷の朝日おとらるが如く消失て  
身おすまひさる小袖と一具の骸骨のをも褥の上お残りも様ひめ絶世  
の養人ありといふも骨と化してあの人おらるもとふお醜養へ只臭皮  
一重おめるの好色の輩おふ於て悟とへお相とあけけ体をつつて且



常照阿闍梨  
 の教  
 怨霊得脱を  
 爲す  
 散骨と  
 まれ





死し其愛妻五人を殺し髡頭面小墨して其形をうの于寶が母夫亡  
る小及び寵愛の侍婢を生まざり夫の墓中小埋むいたゞひの妬婦のり  
とつども世分の方の隠悪のごと死にいまいふ誠是極重悪人といひつ  
べ天刑をうりありて雷死せしも理ぞし和漢の古と考ふる隠悪を犯せ  
者雷死せしゆまゝと常言を人々瞞べたを瞞へくどこのつり明る所  
小王法のり暗ころ小神靈のり隠悪を犯して豈能罰をまねんや  
世分の方の雷死のど死に世人のよれ教戒ありせりて冥途の苦患を  
とらひつらんとべりて庭ふとらし焼くされる屍ふむひてとらしく  
経をよとむひ初宗雄小告て棺をつくりしわ世分の方の屍と様ひりの遺  
骨をよとめえ二ツの棺をるべとて引導の語をさぐりけむひわれは一家  
中の男女次の間小居るがれて歎悲色とがくハるらるらわくても人の

明巻之五

送葬をかこみひ追善の仏事をいへるまで阿闍梨の弥陀二郎乃公  
とも小い館小逗留しむひぬとる小宗雄田鳥造酒丞篠村二郎の友人  
を近く味てみるハ男義春相公存生の時某を様ひりわのハさんと  
定むひハ畢竟血をらとよとほはさ為るる小探ひりうせしれう  
某の家を續時たつと後妻をむりて一子を生まうくるも苗家の血とら  
ハ絶る乃死するもて安義春の甥なる少年を吉備津の林王額田  
小某とやんが養子小つらハこれらるがやとあも今ハ実子をまうひらる  
はし幸のまきさればいのあ年をとを取汝等友人補佐して苗家を續し  
ちこれ血をらと絶るらる計小あしとわ我ハ今より菩提の道小  
つり剃髪染衣小姿をうて男夫婦姫兄弟玉琴等が菩提をこりん  
と心をさめられ万言汝等友人小たのいけぞましく忠節を尽すと



玉琴の怨鬼つくるふ  
 うりて野分の方十八  
 年前の隠悪の  
 のれ雷ふるるれ身体  
 をけて死を天刑  
 遅速わらへ  
 なるのまゝ  
 ひふり  
 かまれ  
 べし

と云とつりて小鞠巻を抜髪ふつこころとて阿闍梨小ひくひ某曾  
法然上人の活佛をすて渴仰のふひ深くこひねがく上人の徒弟  
とほむりれじとてひこころとて阿闍梨これをこころとて殊勝小と  
つれとてやふふけぐひひくひつひ小宗雄弥陀二郎ふかを具して館  
をひんごを田鳥篠村これをこころとてふこころとてあく涙こころのふ送たり

第二十

櫻塚楊貴妃櫻来由

つくて宗雄法然上人小調一受戒剃髮して法名を随蓮房源宗と云  
つりね抑上人の法名を源空とせしめ両師ふてかつけ持宝坊源光  
の源の字と慈眼坊觀空の空の字とをとりて源空と称したすひ一あり  
たりとりてその例をひれ源空の源の字とをとり宗雄の宗の字と  
との併小源宗と名づけひひ一とてやとて源宗法師のこころをこころ

我び都小をまりく閑寂の地を好て北岩倉小菴をひとび九品乃  
行業不退ろり日西山小没時へ遙小十萬億刹の土をる風嶺松を  
吹折へ近常樂我浄の觀を凝を六時の礼讚色澄て朝暮の念佛  
つと貴く誠小殊勝の体まりろりある小田鳥篠村の兩人は片時も主君  
あつてへあつてと宗雄が今のどく義春の甥十五歳ふありろり少年を  
と取て家督と一就鳥尾四郎義基と名告せや安堵のふひをほけるが  
お人合て源宗法師の菴小来りあるのよをわらしてたしめさて  
庵中のありさめをえてやしるる草の庵小住むゆいおのすのまり  
とやわらじれゆ夏ありひろの家を造匠從者なども召仕ふへり  
我くくくくくくひひひひと云源宗打笑汝等が志のこかると  
我遁世のよとある人へかる住居を好まうけれのり美廉の室を



其二

明卷之五



〇九一

のこりんや世不望と云へ唯一ツありのこり別更ふのこり弥陀二郎筆末  
一字を建立して感徳の靈仏を安置せむに宿願ありとつともしつと  
遂によし我け大旦那とすべし望あり義春相公夫婦清玄法師  
梅ひれ玉琴等が菩提の乃いじりた功德ありは汝等け更をよきと  
らひて得させしと云ふも人びてそいひて安死御更あり速ふた  
らふべしとて國ふりりわゆる金の銀をせりて弥陀二郎ふへけれ  
二郎乃公ちふた移ひ則宇治郡五箇の庄ふ一字を建立し其の靈仏を  
安置して常照阿闍梨を用基の主とて不断念仏の道場とせはふ  
ける西方寺とつゆのへをるつら是るりしと

山州名跡志を案ふ弥陀二郎道心常照阿闍梨とのふの寺ふ  
住人皇八十五代後堀河院の御宇貞應元年七月十日二人ひとく

本尊の示現を得て同日同時ふ安祥とて大往生をうけぬ

二人の木像今ふのりしと記せり

かくて源宗法師弥陀二郎が宿願をこげりてまのりまのりまのり  
けるふ一夜極みめの亡靈枕上ふ立いとうせける顔ふて告て云ふん牙  
菩提の乃ふ入ふふふふ我等が乃ふ仏堂を建立のり大功德ふ  
よりて我輩親子兄弟五人愚趣の苦患をまねれ安養浄土ぬ  
生り更を得たり其證ふせりんとひて仏壇ふ供ふたれける木の  
枝をこりつ云けるこれを庭上ふさかきあへかきまね根を生ど  
て花咲るん是乃我輩が成仏得脱の證ありとてふへ又云兄清玄  
法師の遺骨を初時の草ひつ小残とね何とを拾取て埋葬し其の  
石と建てむりれりしつらまのり名残のつねに佛の体をつけりし



早の 宗雄の 發心 法然 上人の 徒弟 剃髮 源宗 夢中 採の 梅の  
 由是 貴妃



暎卷之五

穢土の往来もどくこれぞ長き別れも再會ハ極樂浄土をばと  
云て烟のごとく消るとええが忽軒端の風鈴當的ひびきて  
南柯の夢ハ醒ふより源宗名残をけふわたりをふる小枕上小  
椽の一枝依然として残るわれが奇異のどひをなやの枝をこりて  
庭上ふささ清玄の遺骨を尋りしめ煩惱即菩提の意をり  
ておのれがわらふやくりする様ひめの豔唇をこり知しこのうら小經文  
をわさこのふ一つの箱おさめて姫の終馬の地小野の里小埋く  
一塊の塚とまけ印の石を建て跡ねんごらふらひより櫻塚  
一名文塚といふは乃是ありとぞ

案ふ山州名跡志小櫻塚一名文塚傳云小野の小町豔色ゆるを  
以て四方より豔唇をかくると雨の如し仍て懺悔の為小収る所と  
云本文の説とけ説とに分れ是ありとぞ

源宗法師庭上ふささ椽の枝姫の詞ふたがほど日あざむきて根を  
生ど一度落花なる枝再花咲われ切の成仏うぐひはと歡喜の  
涙袖をまかりぬつひ上人の庵室小往来して法をまらねがかの  
松虫鈴虫の両尼小出會しお治のついで兄弟愛宕の山中小ありし  
時の子細を語をきてその上臆こそ愚僧が姑ふて様ひわら母たり  
こそ雷死のくをささり蝦墓丸義春を打田鳥やれを射殺して仇  
をひくいとる夏を懺悔の為小わたりたれば両尼をきて因果の  
歴然たる理を曉し留丸野分の方お人の乃小一七日あひで別時  
念仏を修行しよりこれ仇と以て思小報ざる志いと殊勝なりといふ  
人へささるる小上人遷化のち源宗南都小移り真福寺小法縁

のふより境内けいごふ菴室あまむろを造て住けるが木の椽せんの木をも携たづなひて庭中  
ふ植うゑぬりてより靈木れいぼくあらば益生えきせいのびて枝葉えだとげり年々経へぶるふ  
大樹おほいぶとありて春毎はるごとふ花爛熳はならんまんとして錦にしんを欺あざむく源宗げんそうふこれ  
を愛あいし花の時はなときあり且夕ゆふ樹下じゆげふ座ざして終日ひらひら終夜しゆうや灯とうをわけてあぐれ  
るふど時ときの人源宗げんそうが愛樹あいじゆありて楊貴妃やうきひ椽せんとよびふりてこれ  
は源宗げんそう唐帝たうていの玄宗げんそうと音ねの響相ひびきあひ似にたるを以てあぐれひけれとぞ  
の椽せん今いまふ猿沢さるさかの東右垣ひがしのみがき五十二壇ごじふにだんの上左うへひだりの方かたふ在ありて枝葉えださるふ  
案あんふ貴妃きひ椽せんの支しりたる説せつふ似にたりとつへども奈良晒ならざし三十三張さんじふさんちやう  
南都なんと名所なしょ記大和案内おほなみのあんない記きふのせと普世ふせふ云い傳でん説せつたり。  
源宗げんそう法師はうし人皇にんかう八十五代はちごじふごだい後堀河院ごけがわいん元仁元年げんにげんねん甲申五月十日かうしんごがつじふにち日  
飯寂いひやく時ときふ享年かうじやう四十歳しじゆうさいとぞ

さるやふふ尾四郎おしろう義基家ぎきけを相續さうぞくし田鳥造たどりぞう酒丞しゆじやう長條村ながぢやうむら  
二郎公にじろうこう光みつあ人補佐ひとほすけしりふ義基ぎき若年わくねんありとつども聰明ちゆうめい伶俐れいりありて  
文学ぶんがく武藝ぶげいふ通とじよく家人かじんを撫育ぶいくしれば一家中いつかちゆうあぶと限かぎあり  
誠まこと小賢せうけん君きみありとぞ敬うやまつしりたるふ承久じやうきう一乱いつらんの刻とき義基ぎき鎌倉かまくら君きみの  
味方みかたふりりて宇治川うぢがはの合戦あひざんありて武功ぶくわうをのこし鎌倉かまくら君きみの  
二品ふたひん禪尼ぜんに平へいの政子せいしの聴きふ達たつし軍功ぐんこう比類ひるいありとぞ叛逆はんぎやくの公郷こうきやうの所領しよりやう  
没収ぼつしゆうの地ちを賞充しょうちゆうするの下文げんげを賜たま先祖せんぞ傳來でんらいの庄園しやうえんふ一倍いちばいして  
益家えきけ富栄ふえい伴ばんの希雄きゆうのそと娘源宗むすめげんそう法師はうしの妹いもうとなりたる楓かえと  
いへるをわたり三男さんなん二女ににむすめを生う夫婦ふうふ長寿ちやうじゆを保子たもこ孫繁茂まことしり  
累代かさね巨萬きよばんの富とみをは桑田くわだの長者ちやうぢやとて近世ちんせいまでも豪農かうのうふてあり  
いとゞね誠まことは一場いちばうの奇談きだんありとぞや



義春の甥を頼身  
 尾四郎義基と  
 名のせ田鳥  
 篠村西人補  
 佐して家を  
 ついで先代  
 忠義を尽  
 一とれ者  
 等小賞を  
 九とんと



案ふ。宇治拾遺物語記卷之四。清水寺の上人進命婦を春恋して。  
 病臥と命婦其病床をさふ。上人忽迷雲とれて云。年来讀經  
 の功德を汝に授べし。俗を生べ。関白根政を生ん。女を生べ。女御  
 后を生ん。僧を生べ。法務の大僧正を生んと。つひ終て往生を果して  
 命婦。宇治殿ふらわれ。京極大殿。四条の宮。三井の宮。春恋して。紺青鬼  
 けり。を記と。又。榊の本の紀僧正。深殿の后を春恋し。紺青鬼  
 と交して。后をなやませ。くとの虚談を源平盛衰記に載り。  
 並に語傳る。清女櫻姫の事跡。原是等の夏を附會して。作りし  
 たる物語。かゝらん乎。

曙草紙卷之五終 大尾

追考

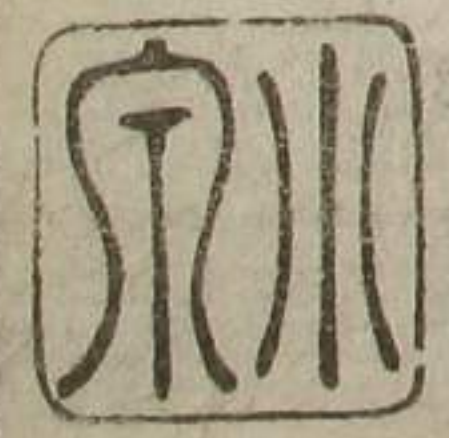
山州名跡志。大枝山大福寺の條下。小本尊の縁記を引て。人王六十六代一條院  
 御宇。市原野。小市森長者と云人住。其女櫻姫難産の乃。落命と。其迷  
 魂のつれ。慧心僧都の教化を受けて成仏するより。を録せり。案ふ。櫻姫の  
 物語。是等をも附會するや。おぼる。何れ。古云傳へる話と。おが

東都

一陽齋歌川豊國畫



割刷氏 小泉新八郎刀



醒々老人山東子著書目錄

○繪本忠臣水滸傳

全部十卷出来

○全復讐奇談安積沼

全部五卷出来

○左優曇花物語

全部七卷出来

○善智安方忠義傳 歌川豊國筆

前編 五卷  
来丙寅冬發行

みちのく外々々の獵師善智安方の忠義其妻錦木の貞節  
其子千代童の孝行。おひお將門の息女如藏尼將軍太郎  
良門の事跡大宅大郎光國の忠孝肉芝仙人蝦蟇妖術  
を施し人民をよめさせし頼光頼信の武徳よりて  
亡きも。前後合して十卷ふ記し。繪八の冊子あり

○骨董集

初編二冊追加一冊合本三冊出来

は書に二百年以後。聞人の傳。并ふ肖像。珍書。奇画。古製の衣服。  
雑器の類。諸家の秘篋。ふ索。数十部の珍書を引。自の考  
と加へて。事と記物と圖し。漫録。尚古の書也

○繪本五説経

来丙寅年刻

朱子讀書丸

清人覺世道人傳方 椿壽奇拜田信明製 一包壹匁五分

○氣をんをほりしおがやえをよくと。心腎のきよとんふより。さのうごあうく。けがらひふより  
○せんのきよとんふより。おがやえをよくと。心腎のきよとんふより。さのうごあうく。けがらひふより  
○せんのきよとんふより。おがやえをよくと。心腎のきよとんふより。さのうごあうく。けがらひふより  
○せんのきよとんふより。おがやえをよくと。心腎のきよとんふより。さのうごあうく。けがらひふより

小兒無病丸

○小兒無病丸のあらはるの茶わうそ。○百百十二文  
○小兒無病丸のあらはるの茶わうそ。○百百十二文  
○小兒無病丸のあらはるの茶わうそ。○百百十二文  
○小兒無病丸のあらはるの茶わうそ。○百百十二文

賣弘所江戸京橋  
山東京傳烟草入店

山東先生。出瀨氏。本姓。拜田。名。田。藏。字。田。藏。一  
 號。醒。醒。老。人。舍。東。都。洛。橋。南。朱。提。街。恒。著。稗。說。  
 以。寓。詼。諧。舉。人。呼。京。傳。子。邨。孩。巷。頗。靡。弗。口。之。  
 而。若。其。名。氏。間。亦。有。弗。諳。者。因。詳。標。榜。編。尾。云  
 東都書舖 僊鶴堂小林近房謹誌

又化二年乙丑冬十二月發兌

○西萊丸の仙女香一包四十八文○黒油美玄香  
江戸系橋南條町坂本氏  
 大徳寺町三丁目丁子屋平兵衛  
 元服田町中橋下丁子屋平兵衛  
 ○金匱救命丸江戸林氏製

發販  
書行

京都 河内屋藤四郎  
 同 大文字屋仙藏  
 大阪 河内屋太助  
 同 河内屋直助  
 同 河内屋茂兵衛  
 江戸大傳馬町三丁目  
 丁子屋平兵衛板

